

中古和文における3語以上の助動詞の連接について

小田 勝

1. 助動詞2語の相互承接順序

古代日本語の助動詞の相互承接順については、橋本進吉(1931)による(1)のような表をはじめ、数種の表が発表されているが、いずれも実態を正しく示していない(「A>B」はAが承接上Bの上位に立つことを示す。以下同じ)。

- (1) I す・さす>II る・らる>III たし
>IV ん・り>V たり>VI つ>VII ず>
VIII べし・まじ>IX めり>X けり・き
>XI らし・らむ・けむ・む・まし・じ

例えば、(1)のI IIについて、中古和文では必ず「(ら)れーさす」の順で現れ¹⁾、「(さ)せーらる」の順になることはない。小田勝(2008)では、中古和文10作品²⁾から助動詞相互承接表を作成し、中古和文における助動詞の相互承接順序を(2)のように確定した。

- (2) ①(ら)る>②(さ)す>③ぬ>④
|た(り・まほし>⑤ず・まじ>⑥つ
>⑦べし>⑧めり・終止なり>⑨
き・まし・けり・む・らむ・けむ

承接順序に両様あるものは、(3)の6種で、中古和文としては、それぞれ左側の承接順序を標準とみなすことができる(詳細は小田2008参照)。

- (3) ④「に-たり/たり-ぬ」、⑥「まほ
しかり-つ/て-まほし」、⑧「ざる-べ

し/べから-ず」、④「つ-べし/べかり
-つ」、⑥「つ-めり/めり-つ」、⑧「つ-
なり/なり-つ(「なり」は終止形接続)」

この調査は、助動詞2語についてその連接(前後関係)を調査したものであり、3語以上の連接について考慮していない点、断定の助動詞「なり」を除外している点³⁾に課題を残していた。特に、断定の「なり」が介在すると、「心地まどひに-ける-な-めり(3-9-なり-8)」(源氏・手習)の「9→8」のように(数字は(2)の□で示した数字である。以下同じ)、(2)の承接順序に従わない例が存することには気づいており、これをどう考えたらよいかが、課題として残されていた。そこで、本稿では、改めて断定の助動詞「なり」を含めた上で、3語以上の助動詞の相互承接の実態を調査し、考察を加えようと思う。

2. 助動詞3語以上の相互承接

助動詞3語以上の相互承接について、注2にあげた中古和文10作品を資料として、日本語歴史コーパス中納言を用いて、検索した。ただし、次のものは採らない。

- ・形容動詞語尾と考えられるもの。例えば「心ざしおろか-なら-ざり-し-を」(竹取60)⁴⁾の「なら」を助動詞として採らない⁵⁾。
- ・「持-たり-つ-らむ-は」(落窪79)、

「などか負くるに-なら-ざら-む」(枕265)、「さすがに人笑は-れ-なら-じ-と」(枕276、源氏③240)、「かの戸の開き-たり-し-に-よ」(源氏③276)の、それぞれ傍点部の「たり」「なら」「れ」「に」を助動詞として採らない。

- ・「劣りざまなら-む-にてだに」(源氏⑤244)は「劣り様ならむ[女]にてだに」と解釈されるから、「なら-む-なり」という相互承接例として採らない。

得られた結果は、助動詞3語の相互承接が157形式、4語のそれは31形式、5語のそれは1形式であった。この形式について、(2)の承接順序1~9を用いて、「られ-に-たり」を「134」、「ざり-つ-らむ」を「569」のように表すことにする。

3.1 「断定なり」を含まない助動詞3語の相互承接

「断定なり」を含まない助動詞3語の相互承接は81形式で、うち74形式は(2)の順に適っている。(4)に全形式を示す(形式のあとの丸数字は用例数である)。

- (4) 134(られ-に-たり⑨)、137(られ-ぬ-べし③⑤)、138(られ-ぬ-めり①)、139(られ-な-む⑩)、られ-に-けり⑬、られ-に-き⑪、られ-な-まし③、られ-ぬ-らむ②、られ-に-けむ①)、145(られ-たら-ず①)、146(られ-たり-つ③)、148(られ-た-めり④、られ-た-なり②)、149(られ-たり-けり⑫、られ-たら-む⑧、られ-たり-き⑦、られ-たり-けむ②)、156(られ-ざり-つ①)、158(られ-ざ-なり①)、159(られ-ざり-けり⑯、られ-ざり-

き⑥、られ-ざり-けむ②、られ-ざら-む①)、169(られ-つ-らむ⑤)、178(らる-べか-めり⑥)、179(らる-べかり-けり①)、189(らる-めり-き①)、249(させ-たり-けり④、させ-たり-き③、させ-たら-む①)、256(させ-ざり-つ①)、259(させ-ざら-む④、させ-ざり-き③、させ-ざら-まし②、させ-ざり-けり②、させ-ざり-けむ①)、267(させ-つ-べし②)、269(させ-て-けり④、させ-て-む④、させ-つ-らむ②、させ-て-まし①)、278(さす-べか-めり③)、279(さす-べかり-けり②、さす-べかり-き①、さす-べから-む①)、347(に-たる-べし⑤)、348(に-た-めり⑦、に-た-なり③)、349(に-たら-む⑭、に-たる-らむ①)、378(ぬ-べか-めり⑳、ぬ-べか-なり⑤)、379(ぬ-べかり-けり⑭、ぬ-べかり-き⑬、ぬ-べから-む⑤、ぬ-べから-まし①)、389(ぬ-めり-き②)、458(たら-ざ-めり①)、459(たら-ざり-き②、ら-ざり-き①、ら-ざら-まし①、たら-ざり-けり①)、469(たり-つ-らむ④)、479(る-べかり-けり①、た-べかり-けり①)、489(た-めり-き④)、569(ざり-つ-らむ⑤)、589(ざ-めり-き②)、678(つ-べか-めり⑥、つ-べか-なり②)、679(つ-べかり-けり⑬、つ-べから-む⑧、つ-べかり-き⑥)、789(べか-めり-き①) 逆順を示すものは6形式であるが、そのうちの5形式は両様ある承接形式(3)に起因するものであり(波線部参照。▲は2語では絶対に承接し得ない助動詞が共起していることを示す⁶⁾)、

- (5) 376(ぬ-べかり-つ-▲⑤)、437

(たり-ぬ^a-べし^①)、439(り-な^a-む^①)⁷⁾、786(べか-めり-つ^c^①)、759(べから-ざり^c-けり^①)

真に逆順といえるのは、次の1例だけである。

- (6) [639] 今年の初雪も、降り添ひて
-な-まし▲。(枕164) <新全集集「今年
の新春の初雪も降って一段と降り積
もってしまったかもしれないだろう
に。」>

この「て-ぬ(つ+ぬ)」は他に例をみない特異例であるが、『三巻本枕草子本文集成』によれば、三巻本諸本において「てなまし」とあるのは新全集が底本とした陽明文庫本だけであって、他のすべての本が共通して「て」のない「なまし」になっており、『校本枕冊子』によれば能因本諸本も「なまし」である。したがって、これは本文上の誤りと考えてよいであろう。

同位の重出は次の1例である(★は「同じ語」が重出していることを示す)。

- (7) [737] 「『折すぎてさてもこそやめ
さみだれて今宵あやめの根をやかけま
し(=難解歌)』とこそ思ひ給ふべかり
-ぬ-べけれ★」と[女(和泉式部)ハ帥
宮(敦道親王)ニ]聞こえて、[寺ニ]参
りて三日ばかりありて帰りたいば(和
泉日記26)

『和泉式部全集本文篇』によれば、(7)の底本とする三条西家本の原表記は「思たまふへかりぬへけれ」、寛元本は「思ひ給へかりぬへけれ」で、たしかに(7)のようにしか読めない。応永本は「思給へかりぬへけれ」とあるので「思ひ給へかりぬべけれ」と読むことになるが、しかしこれでも文意は通りにくい⁸⁾。北原保雄(1969)が明らかにしたように、「べ

し」と「けり」とにはそれぞれ二類があって、「ける-なり-けり」という承接例はあり得るのだから、「べし」の一文中での重出自体はあり得ないことではなからうが⁹⁾、あるいはまた、「ぬべし」が複合辞化してそれに「べし」が前接していると考えられなくもないが、「べかり-ぬ」という承接順は他にまったく例をみない形である上、(7)の本文は意味不通であるので、やはりこれは本文に問題の存する例と考えるべきであろう。以上を要するに、次のようにまとめられる。

- (8) 「断定なり」を含まない助動詞3語の相互承接は、本文に問題のあると考えられる2例((6)(7))を除き、すべて助動詞2語の承接順に合致している。

3.2 「断定なり」を含む助動詞3語の相互承接

「断定なり」を含む助動詞3語の相互承接は76形式で、うち67形式は(2)の順に適っており、逆順を示すものは5形式である。まず、「7□5 べき-なら-ず」(□は「断定なり」は位置を示す)が15例存することが注目される(正順たる「5□7 ぬ-なる-べし」も9例存する)。

このうち8例は、

- (9) ついでなくて^{かる}軽らかに這ひ渡り花をもて遊び給ふべき[身分]ならねば(源氏③165)

- (10) 丹波^{たば}の庄は、年に米一斗^{よね}だに出で来べき[所]ならず、今一つ[ノ莊園]は越中にて(落窪295)

- (11) 夢につらくなど思ふべき[コト]ならねば(蜻蛉234) <ほか、和泉日記87、源氏①62、②297、④258、439>

のように「準体言+ならず」と捉えられ

るが、7例は、

(12) 知らぬ男に出で会ひ、もの言ふとも、人の奥なき名(＝輕薄ナ女ダトイウ評判)を言ひおほすべき-なら-ず(＝ハズハナイ)など(紫日記195)

(13) 入道後の宮(＝藤壺)、御位をまた改め給ふべき-なら-ねば(源氏②300) <ほか、源氏③419、④85、369、467、⑥135>

のように、助動詞の連続と捉えられるように思われる。ただし、この「べし→ず」の順は(3)の㊦で認められる順である。次に、「9□5 し-なら-ず▲」の1例は、引き歌による見かけ上の承接例である。

(14) ひき植^{としつき}系しならねど、松の木高くなり^{としつき}にける年月のほどもあはれに(源氏②351)

これは「引き植系し人はうべこそ老いにけれ松の木高くなり^{としつき}にけるかな」(後撰集)を引いて「あの古歌にいう「引き植系し」ではないが…」の意である¹⁰⁾。したがって、真に逆順といえるのは、(15)の3形式ということになる。

(15) A 9□7 ける-なる-べし 3例

B 9□8 ける-な-めり▲ 9例

C 9□8 ける-な-なり▲ 2例

いずれも断定の「なり」を挟んで、上が「けり」、下が推定の助動詞となっている点に特徴がみられる。このうち「ける-な-めり」は「なり」を外すと調査資料中には存しない共起¹¹⁾、「ける-な-なり」は真ん中の「な」(断定「なり」)を外すと絶対に存しない共起となる¹²⁾。その用例をあげる。

(16) 「…[浮舟ハ匂宮ノコトヲ]人知れぬさまにのみ、かたじけなくあはれと思ひ聞こえ給へりし[故]に、御心も乱

れける-なる-べし。…」と、さすがにまほならず(＝アリノママデハナク)[事實ヲ侍従ハ時方ニ]ほのめかす。(源氏⑥207) <ほか、源氏②183、⑥267>

(17) [源氏ハ葵上ノコトヲ]まことにやむごとなく重き方[トシテ]は、ことに思ひ聞こえ給ひける-な-めり、と[頭中将ハ]見知るに、いよいよ[葵上ノ死ガ]口惜しうおぼゆ。(源氏②56) <ほか、落窪233、和泉日記27、59、枕198、216、源氏⑤458、⑥128、236>

(18) 「[宮ハ]勝たせじと思しける-な-なり」とて、上(＝帝)も笑はせ給ふ。(枕165) <ほか、源氏③212>

同位の重出は、次の4形式である。

(19) D 9□9 ける-なら-む▲ 3例

E 9□9 ける-なり-けり★ 3例

F 9□9 し-なら-む▲ 1例

G 9□9 し-なり-けり▲ 3例

まず、DとEの例をあげる。

(20) 「^{おまへ}御前の池」、また何の心にて[コンナ高貴ナ名ヲ]つけける-なら-むとゆかし。(枕89) <ほか、枕88、源氏⑥236>

(21) [右近ハ]あやしと見ければ、道にて(＝隨身ニ渡スマデノ間ニ)[薫ヘノ浮舟ノ返事ノ手紙ヲ][ナント]開けて見ける-なり-けり。(源氏⑥177) <ほか、落窪87、源氏④319>

以上のA～E(助動詞3語における承接順の違例全24例中の20例を占める)は、助動詞「けり」を前項にもって、A～Dは「けり」の推量の形、Eは「けり」の気づきの形であると捉えられる¹³⁾。「けり」に推量の形が存することは、一見「けり」を非直接体験過去とする説に有利であるようにも思えるが、過去推量の助動詞「け

む」が「き」の推量形(「き」の未然形「け」+「む」)だとする(濱田敦1955など)なら、「き」も「けり」も等しく推量の形をもつことになり、A～Dの現象が「けり」を非体験過去とする根拠にはなり得ないだろう。むしろ「き」と「めり」「なり」との共起例(「*し-な-めり」「*し-な-なり」)が存在せず、「けり」とのそれ(「ける-な-めり」「ける-な-なり」)が存することは、「けり」を「現在まで連続する過去」、「き」を「現在と隔絶した過去」と捉える説に有利であるようにも思われる。

(19) Fの「し-なら-む」は、次の1例である。これは、過去の事態に対する原因の推量であるから、「き」を直接体験過去と考えても矛盾はないが、「けむ」と同意なので、どうして「けむ」を用いないのかはよく分からない。

(22) 「いかでかさつれなくうちふりて(＝古クサイ恰好デ)ありし-なら-む。いみじうめでたからむとこそ[私(側近ノ女房)ハ]思ひたりしか」など、仰せられたる御返しに、かしこまりのよし申して(枕150)

(19) Gの「し-なり-けり」は、いずれも過去の事態に対する気づきを表しており、(23) (24) は(直接経験した)過去の事態に対してそういう事態が起きた理由に思い当たったの意、(25) は(直接経験した)過去の事態に対して今改めて思い返したの意で用いられている。

(23) [兼家ハ作者ノ許ニ泊マラズニスグ帰ツタ時、今夜モ来タ数ニ加エヨウト言ツタ] その後おぼつかなくて、八九日ばかりになりぬ。かく思ひおきて(＝計画シテ)、「数には」とありし-なり-けりと思ひあまりて(蜻蛉292)

(24) さらに、[明石入道ガ源氏ト明石君トヲ結婚サセタノハ]かかる[瑞夢ノ]頼みありて、あながちには望みし-なり-けり。(源氏④128)

(25) [四月下旬、初瀬詣デタ浮舟ノ女房ノ詞][浮舟様ハ]さも苦しげに思したりつるかな。泉川の舟渡りも、まことに今日はいと恐ろしくこそありつれ。この二月には、水きさらぎの少なかりしかばよかりし-なり-けり。(源氏⑤490)

以上、(19) Fは「き」で表される過去の事態に対する原因推量、(19) Gは「き」で表される過去の事態に対する気づきの形であると捉えられる。

3.3 助動詞4語の相互承接

「断定なり」を含まない助動詞4語の相互承接は6形式で、すべて(2)の順に適っている。

(26) 1348(られ-に-た-めり①)、1378(られ-ぬ-べか-めり①)、1379(られ-ぬ-べかり-けり①、られ-ぬ-べから-む①)、1489(られ-た-めり-き①)、3478(に-た-べか-めり①)

「断定なり」を含む助動詞4語の相互承接は25形式で、うち15形式は(2)の順に適っている。

(27) 13□8(られ-ぬる-な-めり①)、14□7(られ-たる-なる-べし①)、14□8(られ-たる-な-めり①、られ-たる-な-なり①)、15□7(られ-ぬ-なる-べし①)、15□8(られ-ぬ-な-めり④)、15□9(られ-ぬ-なり-けり①)、24□8(させ-たる-な-めり①)、24□9(させ-たり-なら-む①)、25□9(させ-ぬ-なり-けり①)、34□7(に-

たる-なる-べし①)、34□8(に-たる-な-めり①)、37□8(ぬ-べき-な-めり⑥)、45□7(たら-ぬ-なる-べし①)、149□(られ-たり-けり-なり①)

逆順のものは、次の7形式、

- (28) [27□5] さす-べき-なら-ず[㊟]
(源氏②389)、[39□7] に-ける-なる-べしA(枕84、源氏①155)、[39□8] に-ける-な-めりB(落窪241、和泉日記60、源氏③90、⑥296)、[49□7] たり-ける-なる-べしA(源氏⑤451)、[49□8] たり-ける-な-めりB(落窪161)、り-ける-な-めりB(源氏⑥308)、[69□8] て-ける-な-めりB(源氏②134)

同位の重出は、次の3形式であるが、

- (29) [19□9] られ-ける-なり-けりE★(源氏②32)、[49□9] り-ける-なり-けりE★(落窪311、源氏③293、⑤401)、[59□9] ざり-ける-なり-けり★E(竹取37)

いずれも波線の部分に、2語の両様形式(3)か、3語の逆順形式(15)(19)を含んだもののみである。つまり、4語独自の逆順形式はみられない。

3.4 助動詞5語の相互承接

助動詞5語の相互承接は、極めて稀であり、調査資料中には1例しかみられない。

- (30) [249□9] かからむ(=コウイウ運命ダロウ)とて、ものの(=神霊ガ)知らせ言はせ-たり-ける-なり-けり★と思ひ臥したるほどに(蜻蛉236)

調査資料以外でも、中古の作品では、管見では次の1例を得るのみである¹⁴⁾。

- (31) [349□9] 昨夜のこと^{よべ}にめでて

入りに-たり-ける-な-めり★。(枕・能因本、完訳日本の古典『枕草子①』24頁)

いずれも3語の同位・逆順形式(19)E「ける-なり-けり」、(15)B「ける-な-めり」を含んだものであり、5語独自の逆順形式はみられない。

4. 述語の拡張形式と再述語形式と

以上を要するに、助動詞3語、4語、5語における相互承接の逆順例は、次の4種だけであり、いずれも断定の「なり」を介することで成立しているといえることができる。

- (32) I 「けり」の推量の形((15)A～C、(19)D) 17例
II 「けり」の気づきの形((19)E) 3例
III 「き」の原因推量の形((19)F) 1例
IV 「き」の気づきの形((19)G) 3例

文が一旦断定の「なり」で括られれば、助動詞の相互承接順序の制約は解消されて、その後の助動詞の承接は自由になるように思えるが、「ける-なら-ず」のような形は存せず、逆順例のすべてが「なり」を介した「過去+推量・気づき」の形であるという点に注目されるのである。

ここで、「ける-なら-ず」のような形がないのは、「なら-ず」が稀な形であるからだと一応考えることができる(ただし調査資料中18例存するが)。あるいは「ける-に-は-あら-ず」のような形なら存するのではないかと考えられるので、試みに「に-は-あら-」という形を調査すると次のようである(「-あら-」には補

助動詞「あり」の敬語形を含む。「ず」には「じ」「で」を含む。

- (33) べき-に-は-あら-ず 12例
ぬ-に-は-あら-ず 8例
たる-に-は-あら-ず 1例
ぬ-に-は-あら-む 1例
む-に-は-あり-な-む 1例

このほか「し-に-は-あら-ぬ」が1例だけ存するのだが、この「し」は準体言なので、承接は見かけ上のものである。

- (34) さきざき御覽ぜし[筆跡]にはあらぬ手の(源氏⑤ 195)

ここで、「断定「なり」」を含まない助動詞の連続形式を「述語形式」、「ける-なら-む」のように「断定「なり」」を介する助動詞の連続形式を「述語の拡張形式」、「ぬ-に-は-あら-ず」のように「補助用言「あり」(「なし」)を介して下に助動詞を従える形式」を「再述語形式」と仮称しよう。

そうすると、如上の現象は、次のようにまとめることができる。

- (35) a 述語形式において生じ得ない
「き・けり」の推量形は、述語の拡張形式において表現される。
b 述語形式において生じ得ない
「き・けり」の打消形は、述語の拡張形式においても、再述語形式においても、許されない。

現代語では「*た-ない」(述語形式)に対して「た-ので-は-ない」(再述語形式)は可であるが、古代語では再述語形式においても「た-ので-は-ない」という表現はなされなかったのである。

このように、述語の表現性を論じる時には、助動詞相互承接の可否だけでなく、述語の拡張形式、再述語形式にも注意を

払う必要があるといえることができる。再述語形式については調査が及んでいないが、(33)をみる限りでは、2語の助動詞相互承接順をよく守っているようである。ただし、同語の重出表現があるので、今後、再述語形式や注9のような表現の詳細な調査が必要であろうと思う。

5. 断定「なり」の相互承接上の位置について

(2)の相互承接順序表に、北原保雄(1969)によって、断定の助動詞「なり」に上接する語を「文字修飾なし」で、「なり」に下接する語を「網掛け」で、上接も下接もする語に下線を付して示すと、次の通りである。

- (36) ①(ら)る>②(さ)す>③ぬ>④たり・まほし>⑤ず・まじ>⑥つ>⑦べし>⑧めり・終止なり>⑨き・まし・けり・む・らむ・けむ

ここから、「なり」は、「(き)」という例外があるものの7と8の間に位置することが知られるが、助動詞3語以上の相互承接において、「なり」の位置をみると、(37) □5(「なり」が5の前)7形式¹⁵⁾

25例

□6(「なり」が6の前)1形式(なり-つ-らむ)1例

が存する。3語以上の相互承接になると、断定「なり」の位置にも若干の揺れが生じ、2語のそれより少し前(6や5の前)の位置に現れる例がみられる、ということが指摘される。

6. 結論

以上、本稿で述べたことは、次の通りである。

1. 助動詞3語以上の相互承接形式は、助動詞2語の相互承接順序の逆順を示すことがある。その逆順例は、断定「なり」を含む次の形式に限られる。

{けり／き} + 断定「なり」 + {推量／気づきの「けり」}

2. 断定「なり」を含まない助動詞の連続形式を「述語形式」、断定「なり」を介する助動詞の連続形式を「述語の拡張形式」、補助用言「あり」「なし」を介して下に助動詞に従える形式を「再述語形式」と仮称する。
3. 述語形式において生じ得ない「き・けり」の推量形は、述語の拡張形式において表現される。述語形式において生じ得ない「き・けり」の打消形は、述語の拡張形式においても、再述語形式においても、許されない。
4. 述語の表現性を論じる時には、助動詞相互承接の可否だけでなく、述語の拡張形式、再述語形式にも注意を払う必要がある。再述語形式については、今後の詳細な調査が俟たれる。
5. 断定「なり」の相互承接上の位置は、助動詞3以上の承接において若干のゆれが生じ、2語のそれより少し前の位置に現れる例がみられる。
6. 中古和文における助動詞の連続形式は5語を最大とするが、例は極めて稀であり、通常は4語以内に収まっている。

注

- 1) 「思ひ出でられさせ給ふに」(源氏・葵)。なお現代語の「書かせられる」のような「使役+受身」の表現は、古典文には存しない。
- 2) 竹取物語・土佐日記・伊勢物語・大

和物語・蜻蛉日記・落窪物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記。下線は、本稿での略称を示す。

- 3) 助動詞「り」も除外している(これは接続に限られるためである)が、相互承接上の位置は「たり」と同一視できるようにである。
- 4) 本文は日本語歴史コーパスの底本とする新編日本古典文学全集(以下「新全集」と呼ぶ)である。数字はその頁数を示す。引用にあたり、表記を一部改めたところがある。
- 5) ほかに「あはれ、あらは、いか、え、おぼろけ、おろか、こと、さやか、ただ、なめ、はなやか、猛、まめ」の下の「なり」を助動詞として採らない。
- 6) 例えば「ぬ-べかり-つ」において、「べし」がなければ、「ぬ」と「つ」は絶対に共起(相互承接)しない。
- 7) 本稿では「り」の相互承接上の位置を「たり」と同一視している。
- 8) 角川文庫『和泉式部日記』(近藤みゆき訳注)の補注20(95-97頁)に要を得た説明がある。
- 9) 「べかる-べし」や「べき-なる-べし」は存しないようであるが、次のような表現は存する。
- ・言はまほしからむことも、一つ二つのふしは過ぐすべくなむあべかりける。(源氏①90)
- 10) なお、期待される承接順(正順)である「5□9 ぬ-なり-き」は、調査資料中には存しない。
- 11) 調査資料外には存する。「なほさべきなめり-けり」と思し嘆かせ給ふに(栄花物語、新全集32巻80頁)など。
- 12) 「なり-けり」とあった場合の「なり」

は必ず断定である。「党多かるな-なり-けり。」(古本説話集、講談社学術文庫・下170頁)の「な」は衍字だろう。

13)「ける-なり-けり」が存在し得ることについては、北原保雄(1969)参照。

14) 中世の資料には、次のような例がある。

- ・ 人もかく沙汰す(=噂スル)など思ひて[高明ヲ]召し返され-に-ける-な-めり。(愚管抄、日本古典文学大系180頁)
- ・ 下りしほどの日記を、この人々の許へ遣はしたりしを見て詠まれ-たり-ける-な-めり。(十六夜日記、新全集299頁)

15) たる-なら-ず、なら-ざり-けむ、なら-ざり-き、なら-ざり-けり、なら-ざら-む、べき-なら-ず、さす-べき-なら-ず。

参考文献

- 小田勝(2008)「中古和文における助動詞の相互承接について」『岐阜聖徳学園大学紀要』47集
- 北原保雄(1969)「中古の助動詞の分類」『和光大学人文学部紀要』3
- 橋本進吉(1931)「昭和6年度講義「助動詞の研究」」『橋本進吉博士著作集⑧助動詞助動詞の研究』岩波書店
- 濱田敦(1955)「助動詞」『万葉集大成⑥言語篇』平凡社

付記

本稿は、表現学会シンポジウム「述語構造と表現性」(令和元年6月1日)で発表したものを改稿したものである。

(國學院大學)